内胸動脈を用いたCABGの吻合部狭窄に施行したPTCA

津田　悦子　国立循環器病センター小児科医師

研究要旨　川崎病冠動脈狭窄に対する内胸動脈を用いたCABG後のグラフト吻合部狭窄をもつ3症例に対して術後2年以内にPTCAを施行し、狭窄の改善に有効であった。

A.研究目的

川崎病冠動脈狭窄に対する内胸動脈を用いたCABG後のグラフト吻合部狭窄をもつ3症例に対して術後2年以内に PTCA を施行し、その有効性について検討した。

B.研究方法

CABG後8ヶ月、1年、1年4ヶ月の内胸動脈グラフト吻合部狭窄をもつ3症例（4歳から16歳）にPTCAを施行した。PTCA のバルーンサイズの選択は内胸動脈と吻合血管の遠位の径を基準に選択した。最高圧は 10 気圧から 14 気圧であった。2例について前、直後、3ヵ月後の、1例について前、直後の狭窄度の改善についてみた。トレッドミル検査、負荷心筋イメージングを施行し、虚血所見の改善についてみた。

C.研究結果

3 症例の内胸動脈に対する狭窄度はそれぞれ、75％から 30％、99％から40％、63％から 9％に改善した。狭窄度の改善度は60ー86％で、平均69％であり、有効であった。前に虚血がみられた2例のうち、1例は改善し、1例は変化がなかった。

D.考察

CABG 後のグラフト閉塞は 2 年以内に多くみられる。これは、小児の 内胸動脈は成人に比べ、血管径が細いため、吻合部狭窄をきたした場合、閉塞しやすいことと、グラフト血流と本来の順行性血流が競合することにより、吻合部狭窄がさらに増悪するためと考えられる。血管形成術により術後の吻合部狭窄を軽減することにより、CABG 後早期におこるグラフト閉塞を予防することができると思われる。

E.結果

川崎病冠動脈狭窄に対する内胸動脈を用いた CABG 後のグラフト吻合部狭窄をもつ3症例に対して術後2年以内に PTCA を施行し、狭窄の改善に有効であった。

F.学会発表

第 11 回日本 Pediatric Interventional Cardiology 研究会　2000.2.4